

明日 への 話題

金融資本主義における 均衡点からの乖離



一般社団法人世界貿易センター東京
会長
政策研究大学院大学
理事・客員教授

こじま
小島

あきら
明

世界の金融・資本市場に衝撃を与えたりーマン・ショックからまる5年になる。そのほぼ10年前にはタイのバツ危機が発生し、アジア、さらにはロシア、ラテンアメリカへと通貨・金融危機が燎原の火のように広がった。日本の三洋証券のデフォルトもバツ危機と同じ1997年のこと。またりーマン・ショックの傷も消えない状況でいまなお続くユーロ圏における政府債務危機が発生している。

2009年に出版されたカーメン・M・ラインハートとケネス・S・ロゴフによる分厚い著作“THIS TIME IS DIFFERENT”（邦訳は2010年刊、『国家は破綻する』）が世界的なベストセラーになったのは金融危機がこうして日常化していることへの不安心理があるためだろう。

タイのバツ危機の翌年、1980年1月に世界経済フォーラム（WEF）主催のダボス会議で朝食をともにしたジョージ・ソロスの言葉が忘れられない。「多くの人がアジア危機だと議論しているが、危機はアジアだけの問題ではない。グローバルな資本主義の危機なのだ」と同氏は断言した。その年、危機はロシアのデフォルトを生み、米国のヘッジファンド、LTCMの経営破綻に及び、タイの危機は資本主義の心臓部ともいべきウォール街にまで及んだ。

ソロスは1998年に出版した著作に『グローバル資本主義の危機』という題名を付けた。彼の議論はこうだ。実物経済とは違い金融経済は市場において瞬時に変わる「期待」により、これまた瞬時にかつ巨額の取り引きが行われ、その価格である金利、為替レートは新古典派経済学における理論的な「均衡点」からいくらかでも乖離してしまう。“マネー資本主義”が暴走しやすく“実物資本主義”（実体経済）から分離してしまったことが問題だ、というわけである。

昨年、ブカレストで開かれたローマ・クラブの世界大会に参加した。例の「成長の限界」論を発表してから40周年にあたる記念総会であり、次の40年を視野にいられた問題を議論した。最大の課題とされたのがガバナンス問題であり、民主主義政治も市場経済も目先主義の弊害をいかに克服するかが課題だとし、short-termism、つまり目先主義という言葉がしきりに口にされた。

危機の時代にあって、さまざまな分野で物事の本質を点検することが必要なようだ。